

道産材で挑戦するギター製作

ODASHIMA GUITARS 小田島 尚 人



1 道産材に対する思い

ギター製作者を志し抱いた思い。「北海道の木で作ったギターから良い音色は出せないか？」

ギターで使われている材は、主に北米や南米、アフリカなど海外の木が主流です。しかし、日本にも世界に通用する良い音色を出す木はあるはず。その思いを胸に岩手県出身の私がたどり着いたのが、ここ北海道でありました。

豊富な森林を有する北海道にはエゾマツ、イタヤカエデなどギターに使える材があります。実際に昔は国内の大手ギターメーカーがこれらの道産材を使用し、ギター製作していたこともありましたが、しかし、ただ海外の材の代わりとしか位置づけされていなかったのが悔しいところです。

北海道の木でしか出せない音色を模索し、製作を開始しました。

2 木の癖を生かす

飛鳥時代に建設された法隆寺は1400年という長い風雪に耐え、今もなおそのままの姿でたたずんでいます。当時の棟梁は自ら山に分け入り、材選びをしたそうです。山の南斜面にある木は建物の南側に、右に捻れている木は左に捻れている木と組み合わせるなど、木の癖を生かし不ぞろいの材で堂塔を組み上げていったそうです。

ギターでは一般的に製材された板材から作り始めます。そのためか稀に製品となってから反りや割れが生じることがあります。これは、製材された板の状態だと木の癖を見抜くことが困難であることに外なりません。

これらの不具合を防ぐために作ったのが、写真のカラマツのギターです。このカラマツは実際に私が山に入り木を選びました。カラマツはヤニが多く反りなどの癖があります。しかし、その癖を見抜き生かして製

作することにより、丈夫で長く保つ事ができると考えております。木の癖は個性です。個性を知り、生かし取り入れることで、初めてその材の良さが引き立つと思います。捻れや反りの多いカラマツは、建築や楽器製作を敬遠されがちでしたが、カラマツ独特の癖を見抜き、生かすことで初めてカラマツ本来の良さが引き立つのではないかと思います。



3 道産材の育成と保護

昨年の10月8日～9日に大阪で行われたギターの展示会「大阪サウンドメッセ」に出展してきました。

とりわけ今回は恐らく世界初、ギターのボディとネックの全てにアカエゾマツを使用したギターを出品し、多くの方たちから驚きと同時に納得の笑顔をもらいました。

さらに今回の出展で嬉しかったのが、年々多くの製作者の方達がエゾマツを高級材としてギター製作に使用していることです。

このことから、木材の高付加価値利用を目的としながら、今後限られたエゾマツなどの森をどのように保護し、木を育てるかが課題だと思っています。北海道の森が世界を魅了する日がやってくると信じ、そして世紀を超えて北海道の木でギター作りが続くことを祈って、今日もギターを作り続けております。